



まちづくり研究センター報告書 2021年度

巻頭挨拶

まちづくり研究センター長 古市 太郎（本郷）

副センター長 中山 智晴（ふじみ野）

2019年4月に本郷、ふじみ野キャンパスに開所しました「まちづくり研究センター（通称：まちラボ）」は、地域連携によるまちづくり、新たな社会の創造を目的に精力的な活動を展開してきました。これも、地域の皆様やお力添えをいただきました関係者があってのことであると強く感じています。

お陰様で、まちラボのプロジェクトに参加してきた学生も、通常の授業だけでは得ることのできない多くの力、たとえば、世代を超えた方々とのコミュニケーション力、企画立案能力、地域課題の発掘能力などを身につけています。この場をお借りして御礼申し上げます。

まちラボ活動は人と人が集まり語り、課題を共有し、その解決に向け力を合わせ行動する点に素晴らしさがあります。しかし、この2年近くは新型コロナウイルス感染症の流行が影響し、地域活動など対面活動が大きく制限されてきました。人と人が温もりを感じる距離で膝を突き合わせ対話する、ここからまちラボの活動が始まります。この原点を外された形で学生たちは行動しなければならない状況となったのです。

このような状況下で学生たちは意気消沈しているのかと思いきや、ソーシャルメディアを活用し地域の子どもや高齢者とワークショップやイベントを開催したり、ソーシャルメディアだからこそ可能となる地方や外国に居住している方との対話、あるいは、複数のNPOやNGOに声をかけ協働活動を実施するなど、新たな連携の手法を生み出しています。

その成果をこの報告書にまとめ、お届けいたします。是非一読され、皆が笑顔になれるまちづくり活動を共に推進させていきたいと願っております。

今後とも、よろしく願いいたします。

目次

| | |
|--|-----------|
| 「フィールド」で学ぶことについての試論 …… | 1 |
| ～ピエール・ブルデュー「champ」から～ | |
| 「まちラボ」とは …… | 3 |
| 写真で見る2021年の活動 …… | 5 |
| ■まちラボプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ …… | 7 |
| 1. 芸術のマーケティング …… | 8 |
| 2. 「スポーツ」があるまちづくり …… | 9 |
| 3. 文京まちあるきコースづくり …… | 10 |
| 4. 「コロナ禍」での社会貢献活動とは～「SDGs」の17の目標に基づいて～ …… | 11 |
| 5. 廃棄ビニール傘をアップサイクル　サステイナブル社会の形成 …… | 12 |
| 6. 郊外団地・商店街における共生空間づくり …… | 13 |
| 7. ねこっちさんビデオ通信～文京 Deep な人 …… | 14 |
| ■まちラボプロジェクト実習Ⅰ・Ⅱ …… | 15 |
| 1. ヒートアイランド現象抑制に関する調査研究 …… | 16 |
| 2. 人をつなぐコミュニティ空間の創造 in 向丘―サードプレイスを活用して― …… | 17 |
| ■まちラボ研究活動・地域活動 …… | 18 |
| 1. 「学生支援担当者連絡会」（通称：地域ニーズの会） …… | 19 |
| 2. 地域と繋がる掲示板 …… | 20 |
| 3. まちラボ主催シンポジウム …… | 21 |
| 4. Sorting Art（分別アート）プロジェクト …… | 22 |
| 5. 地域新聞発行（地域の衣食住取材・発信企画） …… | 23 |
| 6. 芸術で探る地域のすがた …… | 24 |

「フィールド」で学ぶことについての試論 ～ピエール・ブルデュー「champ」から～

まちづくり研究センター長
古市 太郎

「まちラボプロジェクト演習」を通じて、地域とのつながりの形成や地域課題の解決に対し、一貢献できるよう取り組んでいる。しかし、コロナ禍において学生をフィールドに出しづらい日々が続くと、学生をフィールドで学ばせる意味について考えてしまう。

院生時代に「フィールド」について考えたメモがあることを思い出した。フランスの社会学者ピエール・ブルデューの「champ (英語:field)」についてである。「champ (英語:field)」の日本語訳は、「場」、「領域」、「界」などと訳され、多義的である。「界」は、経済「界」、野球「界」、芸能「界」などの「界」である。この時点で「界」は、英語の field という語がもつ「現場」とは若干違った意味合いがあることがわかる。少し、ブルデューの議論にお付き合いいただきたい。

ブルデュー (1980:173-195=1991:223-250) を参考に、野球を例にして「界」の中身を見てみよう。皆さんがよく耳にする、野球「界」という「独自の世界」が成立するためには、まず、「掛金」もしくは「争点」、つまり「ある利害とそれへの関心」(下記でいうところの①)が存在し、以下の要件から野球「界」は構成される。

① 格付けされた品・名誉/それへの投資

(一流〇〇という称号:メジャーリーグ選手、日本プロ野球選手、莫大な契約金・移籍金/幼児期からのトレーニング、プロ傘下のチーム・名門校・大学への入学・入部など)

② 格付けされた品・名誉に対し関心および好意的感情を持つ人々

(小学校—中学校—高校—大学—社会でプレーするアマチュア選手や野球一般に関わる人々、好意的に応援するファンなど)

③ 格付けを評価する人々、格付け競争に参加した人々

(批評家あるいは評論家、プロ野球・アマチュア野球OB・OG)

④ 選出し格付けをするシステム

(各年代での全国大会(甲子園など)、ドラフト・FA制度、各種メディアの放送・出版)

野球「界」は、ただ野球をプレーする選手だけから成り立っていない。プロを頂点とする選手層(アマ、プロ、メジャーリーグ)、プロを頂点とする構造を産み出すシステム(全国大会、ドラフトなど)、選手を評価・格付けをする仕組み(メディア、批評家・評論家)などからも構成されている。また、プロを頂点とする競争に関わる行為者間の力関係、あるいは「アマチュアプロ」、「日本—アメリカ」などの力関係の現れでもある。そして、プロであれアマであれ、野球をプレーする者あるいは野球観戦する者は、争点となるもの(メジャーリーガーやプロ野球選手)に対する格付け(「アマよりプロの方が上…」や「日本のプロ野球よりメジャーリーグの方が…」)を生み出し、日ごろから、意識的あるいは無意識的に、野球「界」という領域をつくり上げている。

さて、ブルデューの「champ (英語:field)」という視点から、「まちづくり」において、どのような示唆が得られるのであろうか。

それは、「これまで見えてこなかった関係やつながり」などが可視化されるというものだ。その関係やつながりとは一体何であろうか。それは、地域課題あるいは地域で争点となっているものを介して、敵および味方が分けられ、地域住民のグループが色付けされた立ち位置や序列のことである。端的に言えば、「地域社会で闘われている争点を介した人間関係と力関係」である。なかなか、こうした「地域の力関係」、つまり「地域社会は闘いの場」であることまで学生が学べるかどうかはわからないが、地域が持つ別の側面を感じてもらいたいのも本音である。

そして、2022年2月12日土曜日に、まちづくり研究センターが主催するシンポジウムがあった。タイトルは、「地域社会の見える化:「居場所」をめぐって—ジェンダー×看護×福祉—」である。このシンポジウムを通じて、「地域社会の実情」が少しでも詳らかになることを願う。

【参考文献】 Bourdieu, Pierre, 1980, Questions de Sociologie, Ed.de Munit.
(= 1991, 安田尚訳『社会学の社会学』藤原書店.)



2022年2月12日に開催したシンポジウムの様子

「まちラボ」とは

●「まちラボ」の理念と目的

「まちラボ」とは、「まちづくり研究センター」（英語表記は Social Design Center）の略で、本学の建学の精神「自立と共生」に基づく共生社会の構築を目指す「実験空間」である。この空間は、本学人間学部 コミュニケーション社会学科の基盤となる教育理念を備えた「教育・研究の場（研究所）」でもある。教育は、授業、地域で展開するゼミの課外活動や地域のボランティア活動の中で展開され、教員が中心となる研究活動へと発展していく。

「まちラボ」では、社会課題、とくに社会的「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を、学生が主体的に「産・官・学・民」の体制から取り組み、成果を社会に還元していくことを目指す。

●「まちラボ」の活動

「まちづくり研究センター（まちラボ）」は、2019年4月、社会の課題に取り組む産官学民連携型学習を活発化するために開設された。

本郷・ふじみ野両キャンパスに拠点があり、ふじみ野では郊外型（1-2年生）、本郷では都市型（3-4年生）

の社会問題をテーマに取り組む。学生たちは、キャンパス内では見えてこない実社会の課題に対し、地域や企業、行政の方々と協働しながら取り組んでいくのである。

ふじみ野キャンパスでは、ボランティアとしての活動を通じて、課題解決に向けた基礎力であるコミュニケーション能力、チーム力などの育成強化を図る。

本郷キャンパスでは、まちラボプロジェクト演習、まちラボプロジェクト実習というプロジェクト型学習を軸に、多様なテーマから課題を選び、理論と実践を相互に学習しながら、新たな社会の形成に必要な仕組みを創造する力を養っていく。また、授業で培った経験をもとに、新しいボランティア活動の創出を試みる学生も現れてきた。

まちラボ本郷は、赤いロゴがガラス扉に大きく描かれた、カフェのような内装の部屋である。この部屋を授業、ゼミ、イベ



まちづくり研究センター概念図

ント等での利用だけでなく、空き時間や昼休みの休憩場所として利用する学生が増えてきた。学内でのちょっとした打合せや、体験の場としても活用される学内の居場所、サードプレイスなのである。

● 4つのタイプのまちラボプロジェクト

まちラボのプロジェクトには、単位化されるものと自主的なもの、本郷を拠点とするもの、ふじみ野を拠点とするもの、両方で展開するものがある。自主的な地域活動プロジェクトには、活動プロジェクトと研究プロジェクトがあり、教員が中心となって提案された企画に運営委員会からの承認を受け、始動する。

2021年度は、前期に緊急事態宣言期間が続き、学生を地域に出すことのできない状況が続いた。そんな中で提案されたプロジェクトは、教職員が中心となるものが多かった。しかしそれは、教員によって基盤づくりが進められ、学生が地域に出るための足固めをすることにつながり、新型コロナが落ち着きをみせた後期には、学生の参加する姿が見られるようになった。

4つのタイプのプロジェクト概要と掲載ページ

① 授業プロジェクト（単位化）→ p.7～17

授業プロジェクトには、コミュニケーション社会学科3年生必修のまちラボプロジェクト演習と、希望者がゼミとして選択し、4年次に卒論ではなく合同報告書にまとめあげるまちラボプロジェクト実習がある。いずれも10人前後の少人数で行われる実践的なプロジェクト学習である。

② 本郷で展開する地域活動プロジェクト（ボランティア）→ p.18～21

新型コロナが与える地域活動への影響に悩む文京区内他大学との連携プロジェクト、シンポジウム、掲示板活用。

③ 本郷-ふじみ野協働で展開するプロジェクト（授業内プロジェクト）→ p.22

本郷とふじみ野の教員が、それぞれの担当科目の中で、コンセプトと手法が共通のSDGsをターゲットとした体験型授業を実施。

④ ふじみ野で展開する地域活動プロジェクト（ボランティア）→ p.18, p.23～24

大井亀久保地域の生活をモチーフとし、人材や写真記録などを掘り起こして交流へとつなげるワークショップや新聞発行、障がい者福祉関連プロジェクトなど。

まちづくり研究センター 担当教職員

■ まちラボ本郷運営委員会

センター長：人間学部コミュニケーション社会学科 古市太郎

運営委員：経営学部 新田都志子 外国語学部 赤松淳子 人間学部人間福祉学科 青木通

アドバイザー：島田昌和 理事長 研究員：森下英美子 事務担当：川尻しのぶ

■ まちラボふじみ野運営委員会

副センター長：人間学部コミュニケーション社会学科 中山智晴

運営委員：児童発達学科 菖蒲澤侑 人間福祉学科 田嶋英行 武田和久

心理学科 文野洋 コミュニケーション社会学科 岩館豊

研究員：栗原真史 事務担当：渋谷由佳

ゼミでまちラボを使用

登丸あすか先生

専門演習や卒業研究の授業でまちラボを使っています。例年と異なり遠隔授業の期間を経て、まちラボのスペースで学生たちと“再会”しました。ソーシャルディスタンスを保ちつつも距離感は近く、グループワークを楽しんでいます。



大阪にいる講師からオンラインで話を聞く。右端奥で説明しているのが登丸先生。

写真で見る 2021年の活動



FUJIMINO
まちラボふじみ野

まちラボふじみ野の地域活動は、大井ショッピング商店会から始まります。

まちラボふじみ野ラッピング (P.18)

あやめ祭にオンライン参加中!



ぶんぶん新聞第1号、まちラボふじみ野前で配布中! (P.23)



アートオブジェリングづくり
まちラボプロジェクト演習/ミニコモゴモ展 (P.8)



地域の方を招いて、アート制作体験ワークショップを開催。

クリスタルピンローチ制作

まちラボプロジェクト演習/「スポーツ」があるまちづくりプロジェクト (P.9)



コーヒーかす石鹸を作って配布します。

寒さに負けずに調査開始!



まちラボプロジェクト演習/「SDGs」個人から始まる社会貢献活動 (P.11)



SDGsプロジェクトのメンバー

跡見学園女子大学主催の「コロナ禍における大学の地域活動」シンポジウムで、2キャンパスでの取り組みを発表! (P.19)

1~2年次のロゴデザイン制作とブーケづくりワークショップ、制限が多かったけれどコロナ禍だからこそできたことばかり(ふじみ野)

3年次の企業連携プロジェクト。オンラインでの企画会議は質感やイメージが伝わりにくく、対面の時以上にお互い工夫やアイデアが必要だった(本郷)

障がい者施設インターンシップ開発プロジェクト (P.18)



企業研修「フライングカー・コーポレーション (FCC)」実施中

撮影した映像を見て意見交換



HONGO
まちラボ本郷

まちラボ本郷はここから入れます

まちラボプロジェクト演習/ビニール傘アップサイクルプロジェクト (P.12)



傘分解作業中「学生って感じがする!」

アップサイクル傘カバー試作品完成!

まちラボ本郷の新しいシンボルサイン



まちラボプロジェクト演習/ねこっちゃんビデオ通信プロジェクト (P.14)



映像制作は、多くの作業をまちラボで行いました



編集作業中!



Zoomで開催された音楽ワークショップや造形ワークショップ (P.24)



まちラボプロジェクト演習 I・II

人間学部コミュニケーション社会学科3年生の必修授業。
地域社会を教育・研究のフィールドと捉え、
社会問題解決へ向けての地域再生の要となるプランナーや
コーディネーターの能力を有する人材の育成を目的としている。

プロジェクト演習 報告書 1

芸術のマーケティング(島田・小西プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 2

「スポーツ」があるまちづくり(青木プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 3

文京まちあるきコースづくり(貫井プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 4

「コロナ禍」での社会貢献活動とは～「SDGs」の17の目標に基づいて～
(古市プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 5

廃棄ビニール傘をアップサイクル サステイナブル社会の形成(中山プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 6

郊外団地・商店街における共生空間づくり(岩館プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 7

ねこっちゃんビデオ通信～文京 Deep な人(坂口プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 1

まちラボ本郷

芸術のマーケティング

■演習担当教員、学生

島田 昌和・小西 孝典、学生 8 名

■連携先

東京芸術大学後援アートマーケット KOMOGOMO 展活動委員会

■プロジェクト概要

このプロジェクトは、東京芸術大学出身の作家が主催する KOMOGOMO 展とコラボして実施した。このプロジェクトを実施する背景として、KOMOGOMO 展が抱える課題がある。それは、「芸術をもっと身近に感じてほしいこと」「アートにまだ触れたことがない層である若者にもアートの魅力を伝えたいこと」「KOMOGOMO 展を目的に来る人を増やしたいこと」などである。

継続2年目となった2021年度は、地域と若者をアートを通じて繋げることを目標に設定した。大学周辺地域をアート視点で捉えることと、若者にとってアートを身近にするために工芸的なワーククラフトとアートの垣根を無くすことを指向した。前期中に履修学生を対象に KOMOGOMO 展所属アーティストによるアートワークショップを開催してもらった。実際に物を作る活動の楽しさを実感し、その楽しさを広げることを後期の目標に設定した。

後期になって10月には緊急事態宣言も解除され、上野公園での KOMOGOMO 展が久々に開催され、学生有志がその設営の手伝いをおこなった。美術館に囲まれた公園での客層を実感したと同時に、大学生や大学近辺をターゲットとしたイベントを不透明な先行きの中でどう開催するかについて悩み続けた。結論として昨年で開催実績のあるミニコモゴモ展に絞って、目的を果たす方向に集約した。ただし、参加者のターゲットである地域の方々へは、昨年実施したチラシによる告知に加えて

学内でのチラシ告知とストーリー投稿やInstagram広告を付加した。

実施概要としては、12月5日(日)の午後に2つのワークショップを開催した。ワークショップは、①高瀬大輔先生の「アートオブジェリングづくり」、②松永小百合先生の「クリスタルピンブローチ制作」であった。参加者は若者から幅広い世代にわたり、受講学生も制作に参加し、適度なコミュニケーションを取りながら、楽しく和やかにアート制作体験をおこなうことが出来た。

参加者のアンケート結果からも、アートとの距離が縮まったという反応が多く寄せられ、所期の目的を一定程度果たせたと判断している。今後、このプログラムだけでなく、経営学部等でおこなっているアート関連活動なども含めてコンスタントに大学が地域に対してアート活動を提供する事を継続できれば、アートを通じて地域と若者を繋げることが出来ていくと感じている。

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



アートオブジェリングづくり参加者。リング以上のおおらかな作品続出



クリスタルピンブローチ制作中。背中を丸めて細かい作業に集中する参加者

「スポーツ」があるまちづくり

■演習担当教員、学生

青木 通、学生 12 名

■プロジェクト概要

核家族化が進み、独居する高齢者や両親の共働きにより放課後家に帰っても大人がいない子どもたちが増加している。また、災害時における地域の防災機能、犯罪や事故に対する地域防犯機能などは低下しており、地域による人と人とのつながりが希薄になっているためコミュニティの形成は大変重要といえる。このような中で、地域活性化や地域コミュニティ形成を目的とするスポーツを活用した取り組みは数多く報告されている。いずれも世代間の交流が意図されており、地域住民が主体的に運営参加できる点に共通点がある。

そこで、本プロジェクトでは、どの世代においても実施率が高いウォーキング、ジョギングに着目し、まちラボをスタート、ゴールとしたマップ作りに取り組んだ。まちラボを起点とした理由としては、人が集まる拠点として機能することを意図したためである。コースは「後楽園・小石川」「千石・白山」「本駒込・千駄木」「根津・湯島」の4エリアを設定し、前期は名所や健康志向の飲食店等を通過する約5kmの周回コースを検討した。その際、地域住民にとっては居住地域の魅力を改めて実感することができ、また、初めて文京区を訪れた人にとっては区内の文化的特性を歩きながら楽しむことができることを念頭においた。後期は、マップ作りのための現地情報を入手するために繰り返し調査を行い、運動効果を把握するために身体活動量計を活用してプロジェクトメンバーによる測定を行った。4コース平均の歩行時の活動エネルギー量は約390kcal、歩数が約7,500歩と運動効果の期待できる数値が得られた。プロジェクト本来のねらいからは、地域住民と一緒にマップ作りを行い、イベントを実施することによって総合的な効果を検証する必要があったものの、プロジェクトメンバーによるマップができあがったことは大きな成果と考えている。今後は、地域住民にむけたコース情報発信とプログラムやイベントの検討が課題となる。

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



本郷キャンパス中庭からスタート



湯島天神



赤門(東京大学)

文京まちあるきコースづくり

■演習担当教員、学生

貫井 万里、学生 11 名

■連携先

雨音茶寮、合同会社 Vanta、阿部航太事務所

■プロジェクト概要

【プロジェクトの紹介と今年度のトピックス】

文京まちあるきコースづくり「文京区の魅力の発信と発見」プロジェクトは、学生たちが文京学院大学本郷キャンパスが位置する、東京都文京区周辺の様々な魅力ある場所を発見し、自分たちで決めたテーマに沿って、見所スポットをまちあるきコースで紹介するプロジェクトである。2021年度は、文京区内の美味しいお店を紹介する「グルメコース」と「映画・ドラマロケ地巡りコース」を作成した。

「グルメコース」では、おいしいパン屋さんや居心地の良いカフェ、ランチや夕食にがっつり食べたい時にぴったりなラーメン屋さんや洋食屋など多彩なお店が紹介されている。

「映画・ドラマロケ地巡りコース」は、東京国立博物館を皮切りに旧岩崎邸庭園、湯島聖堂、炭田坂、東大前駅、鳩山会館、椿山荘、東京カテドラル聖マリア大聖堂、和敬塾、日無坂を巡るコースである。映画やドラマのロケ地となる場所にふさわしく、いかにもミステリアスな事件が起きそうな豪邸や、何気ない風景なのに郷愁を誘う場所など、歴史的背景や映画・ドラマの内容を思い浮かべながらまちあるきするのもここの場所ばかりである。

前期は、それぞれのコースで紹介する場所を選択し、メンバーが担当する見所スポットの歴史や概要などを調査し、実際に候補のスポットを訪れ、紹介文をまとめた。後期は、マップに掲載する場所を絞り込み、合同会社 Vanta コンサルタントの北爪秀紀先生をお招きして Adobe Illustrator を用いた地図作成の指導を受けた。同時にメンバーが見所スポットのお店や施設に連絡し、パンフレットの掲載許可を頂き、作成した紹介文や写真の確認・校正をお願いした。

連携先とのイベントとして、12月9日に、千駄木駅に近いカフェ雨音茶寮のオーナー那須野浩美様のご協力を頂き、「スワッグ(花飾り)作りとテーブル・コーディネートニングのワークショップ」を実施した。スワッグとは花の壁飾りをさし、水につけずにハンギング(壁に下げる)しながらドライフラワーへの変化も楽しめるという特徴がある。後半は、和菓子とお茶を使ったテーブル・コーディネートニングについて学んだ。新型コロナ感染状況の予測が立てにくいこともあり、今回は、外部からの招待客はお招きせず、グループのメンバーが交代でワークショップを体験した。これは、学生と地域のお店が連携することで、生活と地域を豊かにする方法を探る試みと位置づけられる。

「映画・ドラマロケ地巡りコース」のメンバーは、10月28日と12月9日にコースの全体を歩き、コースを紹介する短い動画に編集した。12月23日に授業時間外活動として、メンバーが映像作家の阿部航太先生を講師とする「映像ワークショップ」に参加し、撮影した動画についてのコメントを頂き、参加者とともに議論をした。



「雨音茶寮」でスワッグ(花の壁飾り)作りに取り組んでいる様子



完成したスワッグ(花の壁飾り)



和菓子とお茶のテーブル・コーディネートニング

「コロナ禍」での社会貢献活動とは ～「SDGs」の17の目標に基づいて～

■演習担当教員、学生

古市 太郎、学生 9名

■プロジェクト概要

今年で、2回目を迎えるプロジェクト。日常生活のなかで、「SDGs」の17の目標に基づいて、個人からできる社会貢献活動を行うということが主たる目的である。端的に言うと、「無理のない身の丈に合った社会貢献活動」。まさに、その姿勢こそが、「社会の持続可能性」の前提となると考えているからだ。

前期は、昨年度の活動報告書を検討し、「今年度自分たちができる活動とは何か」について話し合った。同時に、各自、身の丈に合った「SDGs」活動を行い、30秒の動画にまとめて編集した。動画を編集し鑑賞し合う中で、個人で出来る活動と集団で出来る活動との違いなどが共有され、少しずつ「SDGs」活動についての輪郭がつかめ、集団で取り組む活動の下準備が整った。

後期は、緊急事態宣言が解かれることを踏まえ、フィールド活動と研究活動の検討に入った。フィールド活動では、「コーヒーかす回収」をし「コーヒーかす石鹸」を作成することで、モノの「リサイクル→リユース→社会への還元」を念頭に、コーヒーかす回収班、コーヒーかす石鹸作成班、物品購入係などといった分担作業に取り掛かった。「コーヒーかす回収」においては、昨年度の「貫井プロジェクト」のカフェマップを頼りに、喫茶店を探した。他方、研究活動では、その「コーヒーかす石鹸」の作成が、「SDGs」の17の目標のどこに位置づけられるのかを考察した。

さらに、「社会への還元」については、コーヒーかすを提供していただいた喫茶店にも手渡すことができたほか、大部分は以前のプロジェクト「ほっこり広場」に関わっていた方にお配りする予定である。



まちラボキッチンで、コーヒーかす石鹸制作



カフェからもらったコーヒー出し殻を使った石鹸

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



廃棄ビニール傘をアップサイクル サステイナブル社会の形成

■演習担当教員、学生

中山 智晴、学生 12名

■連携先

株式会社モンドデザイン、大谷清運株式会社

■プロジェクト概要

世界経済フォーラムは、2050年には海洋プラスチックごみの量が海に生息する魚の量を上回るという驚くべき予測を報告した。大量のプラスチックを日常的に使用している私たち日本人は1人当たりの容器包装プラスチックごみの発生量は世界第2位であり、海洋プラスチックごみ問題の一因を作り出している当事国である。この問題を解決するためにはリデュース、リユース、リサイクルの3Rを徹底するとともに、プラスチックに依存しないライフスタイルへの転換が必要である。

本プロジェクトは、廃棄物に熱を加え別の製品に再生させるリサイクルではなく、廃棄物の特性を生かしてエネルギーを極力使わずに再製品化するアップサイクルに注目している。そして、アップサイクルの対象には1年間で8,000万本もが捨てられてしまうビニール傘を選定、企業と連携し新たな商品を企画・販売すること、そして、その過程でプラスチック汚染の現状を一般の方々に広く啓蒙していく活動を展開することを目的としている。

本プロジェクトの独創的な点は、

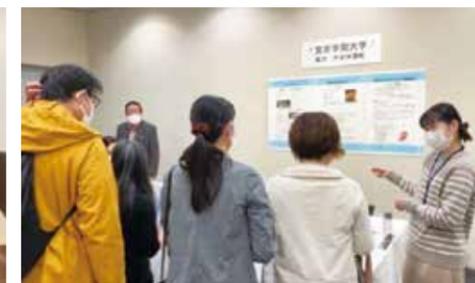
1. 廃棄物処理・リサイクル事業者（大谷清運株式会社）、アップサイクル商品開発・販売事業者（株式会社モンドデザイン）とプラスチックごみ削減アイデア企画者（大学生）の3者が連携し、それぞれの得意を持ち寄り企画・実施されるプロジェクトであること。
2. 身近であり廃棄されやすいビニール傘に注目し、プラスチックごみの状況を広く知ってもらうこと。
3. 熱を加えるなどエネルギーを消費し他の商品に生まれ変わらせるリサイクルとは異なり、廃棄物そのものの素材を活用しエネルギー消費を抑制したアップサイクルの方法で商品を企画し販売すること。
4. 単に環境配慮型商品を企画・販売するだけでなく、商品に、学生のコメント、活動概要、プラスチックごみの状況などを発信するQRタグを付け販売する。これにより情報発信機能も兼ねた商品開発を展開し、自分たちの活動を伝え、環境問題などを広く一般の方々が考えるきっかけを作ること。

である。

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



アップサイクル製品傘カバー試作品。
上は使用時、下は持ち運び時



文京エコ・リサイクルフェアに参加

郊外団地・商店街における共生空間づくり

■演習担当教員、学生

岩館 豊、学生 11 名

■連携先

さいころスペース

■プロジェクト概要

本プロジェクトが始まった当初は、コロナ禍におけるローカルイベントの模索として、団地商店街の複数店舗と連携したイベントの準備を進めていた。しかし、夏休み前からの再度の感染急拡大に直面し、計画の見直しを余儀なくされた。夏休み中にオンライン・ミーティングなどを行う中で、秋のイベント実施は断念し、「みさと団地ビジュアルブック」を制作する内容へと切り替えた。

「みさと団地ビジュアルブック」は、みさと団地の「魅力」「価値」を大学生の視点から探索し、写真と文章によって表現していく冊子である。今回は、残された時間での制作となったことから、「試作」という位置づけで、若者の目線から、団地や商店街活性化のためのヒントを探るとともに、ビジュアルブック制作のノウハウを蓄積することを目的とした。11月以降、数度にわたって、学生がみさと団地を歩き、スマートフォンで写真を撮影した。また、連携してイベントを開催予定だった、団地商店街にあるボードゲームカフェ・さいころテーブルの店主さんへ取材を行い、紹介記事を掲載した。

当初立てていた計画の代替として制作されたビジュアルブックであったが、結果的には、今後豊かに発展していく可能性を感じるものとなった。学生たちは、約50年前に居住開始された人工的な空間である団地を、ヒトだけでなく建造物やモノ、動物、植物、虫といった非人間にも着目し、さまざまな角度、構図、遠近、光の当て方から見つめていった。制作された冊子は、内容的にも技術的にも、まだまだ荒削りであり、洗練されていく余地を多く残している。と同時に、コロナ禍をくぐり抜け、みさと団地という空間が今後も豊かに活用されていくためのヒントや示唆を多く含んでいる。



冊子の表紙



さいころテーブルさんへの取材風景

ねこっちゃんビデオ通信～文京 Deep な人

■演習担当教員、学生

坂口 博樹、学生 11 名

■連携先

有限会社「岩夢」(映像制作会社)、地域連携ステーション「フミコム」(文京区社会福祉協議会内)、地域情報発信カフェ「Rural Coffee」(向丘1丁目文京学院大学そば) 文京メディア・ブリッジ合同会社

■プロジェクト概要

本プロジェクトでは、学生が根津、向丘、千駄木、白山(ねこっちゃん)(+本郷、弥生、西片)地区の人々と関わり、町の今と歴史を知り、地域のキーマンや面白い人をビデオで紹介する映像コンテンツを制作している。

出演者に、地域の歴史や思い出、今の生活、町の現状、町についての思いなどを語っていただき、それを撮影する。ゲストによって地域をさまざまな視点から取り上げ、リアルな感覚を視聴者に伝え、それを記録するアーカイブ的な作品作りを目標としている。

前期の授業では、地域の調査と基本的な撮影・編集技術を身につけることを目指し、前期1本、後期3本の撮影をすることができた。1作は20分程度のショートムービーとし、まちラボやYouTubeで発表する。また制作した4本のショートムービーをつなげ30分程度の作品に編集し、文京映画祭に出品した。

◆ 2021年度の撮影は

・7月8日 根津教会役員の内山雅之さんインタビュー撮影。

根津教会は1919年(大正八年)に建てられ今に残る貴重な木造建造物。長い間地域に根差して存在し続ける教会。その古い礼拝堂にて役員の内山さんにお話を伺った。

・10月21日 一般社団法人せんとくとまち代表理事、文京建築業ユース代表の栗生はるかさんに、文京区の廃湯が相次ぐ銭湯事情や文京区の古い街、特に白山のことも伺った。撮影場所は「まちラボ」にて。

・11月4日 本郷と菊坂の歴史に詳しい郷土史研究家の忍足和俊さんと、文京区で地域活動を支援する「文京メディア・ブリッジ合同会社」代表の竹形誠司さんにお話を伺う。撮影場所は「文京メディア・ブリッジ合同会社」にて。

・11月11日 学校の近所、西片にお住まいで地域の歴史に詳しい片貝憲二さんと川口勝子さんからお話を伺う。撮影場所は本学会議室。



ねこっちゃんキャラクター

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



7月8日、根津教会でのインタビュー撮影風景



10月21日、まちラボで撮影



11月4日撮影時の学生スタッフ

まちラボプロジェクト実習Ⅰ・Ⅱ (通年)

人間学部コミュニケーション社会学科4年生の選択授業。

社会問題の改善のために学生自身が問題を提起し、

その改善に向けて立案し、

組織体制を構築しながらプロジェクトを進めていく実践的講義。

本授業は「まちラボプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」で学習した内容を踏まえたもので、

プロジェクト成果を社会へ還元することを最終目的としている。

プロジェクト実習 報告書 1

ヒートアイランド現象抑制に関する調査研究 (中山プロジェクト)

プロジェクト演習 報告書 2

人をつなぐコミュニティ空間の創造 in 向丘 —サードプレイスを活用して—
(岩館プロジェクト)

プロジェクト実習 報告書 1

まちラボ本郷

ヒートアイランド現象抑制に関する 調査研究

■実習担当教員、学生

中山 智晴、学生 11 名

■プロジェクト概要

私たちは便利な生活を追い求めるあまり、日々大量のCO₂を出し続け、地球温暖化をはじめとした環境問題は深刻化している。EU 諸国と比較すると日本では、地球温暖化は地球規模の大きな問題で個人的にはどうしようもないと考える人も多く、環境改善は思うように進んでいない。

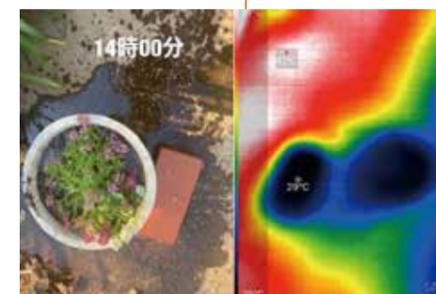
現状を見ると、日本は世界の平均気温上昇の2倍の速度で温暖化が進んでいる。とくに東京や大阪などの大都市における上昇が大きい。この現象は地球温暖化に本研究の対象となるヒートアイランド現象が付加された結果である。特に都市部の温暖化を改善するためには「ヒートアイランド現象」の改善が急がれている。

本プロジェクトは以下3点を主とした目的としている。

- (1) 若者世代の環境意識の向上
- (2) ヒートアイランド現象の抑制に効果的な市民行動の提案
- (3) 環境意識を向上させる地域交流の場づくり

また、上記3点を検討するために、以下5点の調査研究を実施した。

1. 都市をとりまくヒートアイランド現象の調査
2. 環境意識のアンケート調査、意識向上のための提案
3. 小冊子を用いた環境意識向上のための活動についての検討
4. 「打ち水」実験の結果分析と効果的なヒートアイランド抑制方法の考察
5. 環境問題を通じた交流の創出方法の検討とワークショップ開催



環境(天候、地面の性状など)の相違による「打ち水効果」検証実験
(左:性状の異なる地表面、右:サーモグラフィー測定結果)

アンケート調査により、大学生のヒートアイランド現象への関心・認知度が低いことが明らかとなった。そこで、まずは意識を向上させるための環境教育教材(小冊子)を作成し配布を行った。次に、ヒートアイランド現象を抑制するための地域で実施可能な効果的な方法の検討を行った。江戸時代以降盛んに実施されていた日本の文化である「打ち水」に着目し、環境(天候、地面の性状など)の相違による「打ち水効果」を検証するための実験を実

施した。その結果から都市部のヒートアイランド現象

に効果的な「打ち水」の方法について考察している。

最後に、環境改善活動は一人でできるものではなく、地域で対応することが重要となる。そこで、環境すごろくを作成しオンラインワークショップを開催した。コロナ禍でも地域がつながり行動する体制が取れることが実証された。



環境問題を通じた交流の創出(自作の環境すごろくの例)

人をつなぐコミュニティ空間の創造 in 向丘 —サードプレイスを活用して—

■実習担当教員、学生

岩館 豊、学生 11 名

■連携先

株式会社 Rural frontier

■プロジェクト概要

本プロジェクトの目的は、大きく2点である。第1に、文京区向丘地域が抱える課題解決に向けて、「サードプレイス」という視点やアプローチの有効性を、実践的に明らかにすることである。第2に、向丘にあるカフェ Rural coffee（運営：株式会社 Rural frontier）と連携し、小規模かつ試験的なローカルイベント開催を通して、地域コミュニティ発展のためのリソースを再発見することである。

上記の目的のもと、4月からミーティングや打ち合わせを重ね、秋にイベントを行うべく準備を進めていったが、夏からの新型コロナウイルス感染症の再拡大に直面し、計画は大きく修正せざるを得なかった。こうした厳しい状況ではあったが、8月には Rural coffee 主催「向丘こどもまつり」に参加し、9月から11月にかけて「地域の“宝”地図づくり」「古着リメイクカフェ」「ビジネスボードカフェ」の3つのワークショップを実施した。いずれも小規模な実践となったが、感染症対策をこらしながら、無事に企画を実施することができた。

3つの企画はともに試験的な内容であり、まだまだ途上の段階にあることは否めない。しかし、まちを自分たちで歩いて「宝」を探すこと、使われなくなった古着を手作業で再生させること、ボードゲームというアナログなモノを介したゆるやかな会話を持つこと、それらを通じて見えてきたのは「日常の小さなサードプレイス」というあり方の可能性だった。今後掘るべき「鉱脈」を明らかにしたことが本プロジェクトの大事な成果であったと思う。コロナ禍を通じ、日常生活圏が大きく再編されていくなか、自由でゆるやかなつながりを可能にしていく、小さいけれども確かな空間をいかに内蔵していくことができるか。地域社会の課題の一つはこうしたことにあるように思う。



向丘地域の“宝”地図づくりワークショップの様子



古着リメイクカフェのフライヤー

まちラボ研究活動・地域活動

まちづくり研究センターにおける自主的な研究・地域活動。

教職員が企画者となり、大学や地域の中で展開する活動。

学生参加が望ましいが、コロナ禍では難しい状況にあり、

オンラインでの参加や授業内プロジェクトとして実施されたものもある。

活動報告書 1

「学生支援担当者連絡会」（通称：地域ニーズの会）（古市・森下プロジェクト）

活動報告書 2

地域と繋がる掲示板（森下プロジェクト）

活動報告書 3

まちラボ主催シンポジウム（古市・森下プロジェクト）

活動報告書 4

Sorting Art（分別アート）プロジェクト（森下・菖蒲澤プロジェクト）

活動報告書 5

地域新聞発行（地域の衣食住取材・発信企画）（菖蒲澤・岩館・文野・栗原プロジェクト）

活動報告書 6

芸術で探る地域のすがた（菖蒲澤・岩館・栗原プロジェクト）

また、その他のプロジェクトとして、以下に概要を紹介する。継続プロジェクトは来年度報告予定。

活動 7（継続）

インターンシップ・プログラム開発（田嶋・武田プロジェクト）

障がい者就労支援施設にて、経営やマネジメントを意識したインターンシッププログラム開発の実施。

活動 8（継続）

ふじみ野昭和アルバム（栗原・岩館プロジェクト）

写真や映像を集めて昔話りの交流会を開き、地域に点在する歴史的な資料の収集・保存・活用に貢献。

活動 9（完了）

まちラボふじみ野ラッピング（菖蒲澤プロジェクト）

まちラボふじみ野の外観に、学生による手づくりラッピングを施すことを企画したが、残念ながら新型コロナのため業者委託となった。デザインは倉嶋正彦（経営学部教授）。完成したラッピングは P.5 参照。



「学生支援担当者連絡会」 (通称：地域ニーズの会)

■担当：古市 太郎、森下 英美子

文京学院大学から「地域連携ステーション*」への相談がきっかけとなり、コロナ禍で学生と地域との連携における形も変わる中、文京区内の大学の学生支援の取り組み内容と実施体制を伺う機会として「学生支援担当者連絡会」を2021年4月から毎月行ってきた。これまでに東洋大学、跡見学園女子大学、東京大学、拓殖大学、日本女子大学、中央大学の取り組みを伺いながら、お互いの情報交換を行ってきた。

大学の垣根を超えた「つながり」が形成されてきている。なぜできているのか。この会は、「この状況下でいかにして学生に教育機会を準備できるのか」という想いに支えられているからだと思う。大上段に大きな目的を立てるのではなく、柔軟に対応しながら目的をあぶり出していく。まさに、大木を削りながら彫刻作品を産み出すかのようだ。「VUCA時代」ならではの対応といえよう。

12月25日には、跡見学園女子大学主催のシンポジウムに、各大学が連携して参加するという運びとなった。まちラボからは、4人の学生がふじみ野から本郷につながる活動についての発表を行い、好評をいただいた。

*文京区社会福祉協議会が行っている「地域連携ステーション フミコム」は、地域の活性化や地域課題の解決を目指し、新たな担い手の育成や、新たなつながりを創出するため各種事業を行っている2016年4月にオープンした協働の拠点。

| 日時 | 開催校・場所 | 参加大学数(人数) オンライン含む |
|--------|-------------------|----------------------|
| 4月26日 | 文京学院大学・まちラボ | 3大学(8名) |
| 5月24日 | 東洋大学 | 5大学(12名) |
| 6月21日 | 跡見学園女子大学・旧伊勢屋質店 | 4大学(10名) |
| 7月26日 | 拓殖大学 | 5大学(16名) |
| 9月28日 | 日本女子大学 | 7大学(18名) |
| 10月26日 | さきちゃんち・workspace | 6大学(11名) |
| 11月22日 | 文京学院大学・まちラボ | 6大学(11名) |
| 12月25日 | 跡見学園女子大学・ブロッサムホール | シンポジウム |



学生支援担当者連絡会議。第1回は文京学院大学まちラボ本郷(上)にて。第5回は日本女子大学(下)にて。参加者が増えてきた



跡見学園女子大学12/25開催の「コロナ禍における大学の地域活動」シンポジウムで発表。



クリスマス返上でシンポジウムに参加。ささやかなクリスマス気分を楽しむひととき

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



地域と繋がる掲示板

■担当：森下 英美子

まちラボ本郷の白いフェンスの向こう側に、A1パネルサイズの掲示板がある。これは、「地域の方々にはまちラボが何をやる場所かわからないので、看板を作ってはどうか」という提案に応じて作られたものだ。当初はまちラボの説明看板として考えていたが、お知らせも掲示できるものにしようという意見が出て、ホワイトボード掲示板(マグネットで貼れて、マーカーで直接書ける)が誕生した。

完成したのは2年前、ちょうど新型コロナが猛威を振るい始めたころでもあり、最初に掲示されたのは、「新型コロナのためしばらくお休み」のお知らせだった。第2波が来た9月、前年には地域の方々をお迎えしていた地域食堂「ほっこり広場」のメンバーからのメッセージを掲示。少し落ち着いた12月の始めにまちラボプロジェクトのプログラム「ミニコモゴモ展」開催のお知らせが掲示された。その後、年末にやってきた第3波が少し落ち着きを見せた3月末に、「まちあるきマッププロジェクトのマップ配布」のお知らせを掲示することができた。

このように、新型コロナに翻弄され続けた掲示板に、コロナとは関係なく定期的に掲示できるものはないかと考えて生まれたのが、「まちラボ自然だより」だ。自然が好きなおまちラボ職員が、キャンパス内自然の写真と短い解説でつづり、月1回以上、不定期に掲示した。第1号はサクラの開花。草木も花が咲けば花の話、雨の時期にはコケの話、夏は木に集まる虫たちの話、自然や人との関係など、調べればいろいろなことがわかり、それをわかりやすく伝えることを心がけている。

地域の方々がどのくらい見てくださっているかわからないが、担当者にとっては、改めて四季の変化を感じる機会となり、ちょっとしたライフワークとなっている。本郷キャンパスの前を通ることのある方は、少し足を止めて、掲示板に目を向けていただけるとうれしい。



まちラボ花だより-3月16日



まちラボ花だより-5月21日



まちラボ生き物だより-8月26日



まちラボ生き物だより-12月9日

- 担当 古市 太郎、森下 英美子
- 日時 2022年2月12日土曜日 13:00～15:00 Zoom
- タイトル 地域社会の見える化：「居場所」をめぐって -ジェンダー×看護×福祉-
- パネリスト



外国語学部・甲斐田 きよみ先生（ジェンダー論）
「地域と世帯とジェンダー規範」



保健医療技術学部・米澤 純子先生（地域看護学）
「地域共生社会に向けた
コミュニティ再生による健康づくり」
～安心を生み、力を引き出し、新たなものへつなげる～



人間学部・奈良 環先生（介護福祉学）
「地域社会へのソフトランディング」



- コーディネーター まちづくり研究センター長 古市 太郎（地域社会学）

■シンポジウムの概要

地域課題は複雑かつ複合的である。三氏は、各専門分野からどのように地域課題をとらえ、どのような対応および対策を講じているのか。ジェンダー論、地域看護学、介護福祉学からみえてくる、アクチュアルな地域課題とは？

例えば、家族及び地域社会の機能はますます「都市化／外部化」している。成績が下がれば、塾へ。親の帰宅が遅くなれば、食事は外食。地域の夏祭りスタッフがいないければ、イベント業者へ。水道の蛇口を閉めてもらう人がいなければ、暮らし安心〇〇へ。あらゆるものを外に任せ、貨幣でつながる社会に。同時に、こうした「外部化」の進展が、女性の家事労働あるいはシャドウ・ワークを担うことで、女性の社会進出を促進する要因となっているのも事実だ。

そして、地域課題に対して「地域協働／内部化」する動きが出てきている。とくに、「サードプレイスとしての居場所」をきっかけに、地域の新たなつながりが生まれている。つながりの「編み方」がポイントになり、そのやり方こそが、「地域の固有さ」につながるのではないだろうか。

そこで、理論と現場を往復されているパネリストの先生方に、「外部化」の利点を踏まえながら、各専門分野からみた地域のつながりの「編み方」あるいは「つなげ方」の教示をいただいた。今後、皆様と共に地域課題の複雑かつ複合さを紐解くことを試み続けたい。

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



- 担当：森下 英美子、菖蒲澤 侑

このプロジェクトは、アートの専門家である児童発達の菖蒲澤と環境の専門家であるまちラボの森下のコラボで誕生したプロジェクトである。

アートの専門家は、アートで制作されたものに使われる様々な材料の行方が、環境の専門家は、牛乳パックやペットボトルを素材とした工作が展示期間を終えると可燃ゴミになることが気になっていた。もしかすると、アートや工作の作品は、ゴミをつくることにつながっている側面もあるのではないかと。

そこで、分別の順番を変えることを思いついた。捨てる前にリサイクルするものを分けるのではなく、材料として同じ材質のものだけを集めて制作すれば、展示期間が終わった後、作品がそのままリサイクル素材や資源となる。それがSorting Art（分別アート）である。

第1段は、プラスチック。海にも陸にも、レジ袋のようなシート状のプラスチックを間違えて食べてしまう動物がいる。シート状のプラスチックを集めて固めることは、そんな動物たちに届くプラスチックを減らすことに役立つ。そして、集めたプラスチックは高温で燃える資源となる。お菓子の袋を閉じるシーラー（百均！）を使ってプラスチックの袋を好きな形に変身させ、ぬいぐるみのように中身を詰めて閉じて作品を作ってみた。

幼児と造形Ⅱ・図画工作Ⅱの授業の中では、「ごみを集めることが楽しくなるゴミ袋」を作ってプラスチックゴミを集めてみた。動物やアンパンマン、家やダルマなど、様々な形のゴミ袋が完成し、家でプラスチックゴミを入れてみたところ、思いのほかすぐに袋がいっぱいになることに気づき、それを閉じると、ふわふわでカラフルなアート作品となった。

環境教育論の授業の中では、クリスマス飾りを作ってみた。靴下の中にお菓子が入っているようなオーナメント、人形やキラキラのロボット、レジ袋もベイマックスに変身。授業の中で作った飾りが、まちラボの部屋を賑やかに装飾してくれた。これには、小学生の環境教育にいいという感想が出てきた。

この初めての試みは、なかなか良い手ごたえがあった。来年度には、別の素材への展開や、ふじみ野幼稚園やふじみ野市環境学習館などでの展開が計画されている。



ふじみ野キャンパス児童発達学科での授業風景と作品展示



本郷キャンパスコミュニケーション社会学科授業で制作したクリスマスアート

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



地域新聞発行 (地域の衣食住取材・発信企画)

■担当：菖蒲澤 侑、岩館 豊、文野 洋、栗原 真史

地域のすがたを様々な面から捉えること、そこで知ったことを整理すること、更に文章や絵などいろいろな方法で表現すること…何か楽しいことを発信すること、受信すること、それらが全て叶う(かもしれない)方法がある。地域新聞の発行だ。

新聞には、情報から娯楽まで様々な要素が詰まっている。地域のために、何をどう、どのように取り上げるか。取材し、まとめ、発信するか。発信元の想いだけでなく、対象となる地域や取材相手、届ける相手のことなどを複雑に考えていかなければならない。

とはいえ、最初からすぐにそのような新聞を作っていけるわけでもない。また、今年度はまだ、授業以外の活動では地域に出ていくことを控えている状況である。そこで、地域の特徴的かつ協力して下さる企業や団体をお願いして、リモートでの取材を行い、記事にまとめた。取材相手の1つは、たたみの橋本さん。文京学院大学ふじみ野キャンパスのすぐ近くに店を構える畳屋さんで、非常に地域のことを考えていらっしゃる店だ。学生たちと畳について調べながら質問を考え、店主にお送りして回答してもらった。もう1つの取材先は、ほうきづくり友の会さん。ふじみ野でも行われていた伝統的な産業であるホウキづくりは、ホウキグサを育てるところから取り組んでいる団体だ。ここには、

教職員が取材にお邪魔し、記事を作った。また、学生たちにはコラム記事を担当してもらい、漢字クイズや間違い探しなどの読んでいて楽しいコーナーを作ってもらった。

不自由な中だが方法を工夫し、まずは第1号の発行が叶った。新聞は近隣の小中学校や市役所、市の施設等で配布してもらっている。今後きっと活動が少しずつ自由になっていく中で、文京学院大学だからこそ、この地域だからこそ、発行できる新聞に育っていくことだろう。様々な地域活動の仲間が増えていくための、活動が育っていくための、小さいけれど大切な1歩を踏み出した活動だった。

詳しい内容は
本学ホームページで
ご覧いただけます。



完成したぶんぶん新聞(記事の一部紹介)

Voice! ぶんぶん新聞のコラムで、ためになる知識を楽しく紹介しました



畳と箒を題材に初めて地域新聞を作りました。オンラインでのミーティングに最初は戸惑いましたが、相談する度に形になっていく第1号を見て、オンラインであっても活動できることが分かり、新鮮な気持ちになりました。私たちが担当したのはコラムでした。個人的に箒はひらがなで「ほうき」のイメージが強いため漢字の箒が持つ意味や他の漢字とのつながりなどを軽めな雰囲気でもとめました。

人間学部 人間福祉学科1年 石田 健次郎

芸術で探る地域のすがた

■担当：菖蒲澤 侑、岩館 豊、栗原 真史

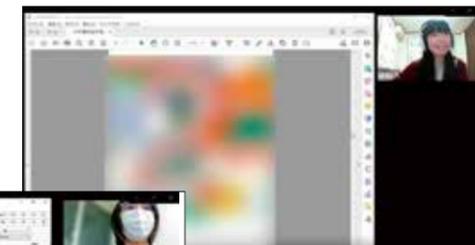
コロナ禍でなかなか人が集えない今、地域のすがたを少し変わった視点で探ることは出来ないだろうか、このプロジェクトを実施した。このプロジェクトは、2つの芸術領域のアーティストの力を借りて、芸術の不思議な魅力と力をもって地域のすがたを感じ、向き合い、見すえることを目指す活動である。

今回は、現在と未来をテーマに、2つのワークショップで構成した。すべて、ふじみ野キャンパスを中心とする地域の方々に協力をいただき、まちラボふじみ野学生がアーティストと共に作品に仕上げていく活動だ。

【現在と向き合う音楽ワークショップ】では、身近な音から電子音楽をみんなで創るプロジェクトを国内外で実施している作曲家・サウンドアーティストの柴山拓郎さんと学生3名、そして東京電機大学の柴山ゼミの皆さんとで、電子音楽の作品を制作した。電子音楽のもとになる素材は、実際にふじみ野市内の昔の暮らして使われていた道具を使うときの音を使用している。【未来を見せる造形ワークショップ】では、市内の小中高校生が描いてくれた絵や数字を、アーティストの近藤愛子さんと学生3名が、5年後のカレンダーに仕上げていく。最後にもう一つ、【過去を感じる身体表現ワークショップ】として、近隣商店街の方々から、地域についてのエピソードをお聞きし、その内容をもとに学生とダンサー・振付家である細川麻実子さんが身体表現作品を創り上げる活動を予定していたのだが、新型コロナウイルス感染拡大状況との調整がつかず、来年度以降へ延期となった。

感染対策のためにどれも Zoom での遠隔ワークショップであったこともあり、なかなか難しい課題であったが、学生たちは丁寧に地域の素材と向き合い、アーティストの皆さんの大きな力も手助けに、作品を仕上げていった。

こうして、地域の音や、未来を担う次世代の絵を、音楽と造形の力で読み取り、生み出し、作品として表現した。これらの作品は、今後、様々な場面で発表していく。コロナ禍を経て地域のこれまでや今、これからについて考えていくとき、芸術もその大きな助けになっていくことが感じられるプロジェクトとなった。



子どもたちが描いた絵から5年後のカレンダーを作るワークショップの様子



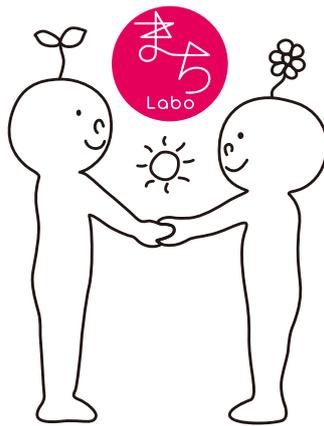
昔の暮らして使われていた道具の音から電子音楽をつくる Zoomでの講義の様子

Voice! プロのアーティストや子供達の力を借りての作品づくりに挑戦



カレンダー作りにプロとの作業、初めての経験が多くとても楽しかったです。子供達が描いてくれた絵やイラスト、素材なんかをみて試行錯誤する日々、一緒に活動していた学生仲間の斬新なアイデアや完成作品のクオリティーに押されながらも「自分なりに最高のカレンダー」を目指して頑張りました。頑張って描いてくれた子供達やお世話になっている方々の手に届けられる日が楽しみです!

人間学部 児童発達学科1年 室井 孝太



まちづくり研究センター Social Design Center

文京学院大学まちづくり研究センター 報告書 2021年度

発行日 2022年3月31日

編集・発行 文京学院大学まちづくり研究センター

【まちラボ本郷】

〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1

TEL: 03-6240-0897 FAX: 03-6240-0898

【まちラボふじみ野】

〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196

TEL: 049-261-7859 FAX: 049-261-7864
